RESEARCH FRONT

現代を取り巻く文化衝突を多文化研究の最前線から見つめて

人文学部教授
石井眞夫
いしいまさお
文学修士
専門分野は、文化人類学
1949年生まれ

グローバリゼーションが進む現代社会では、民族や地域、世代など
文化的背景の異なる人々がともに生活を送る場が広がりつつあります。
三重大学人文学部の多文化共存研究センターでは、
こうした多文化の共存が生み出す問題について
さまざまな視点からプロジェクトを組み、研究活動を展開しています。

植民地主義が生んだ「文化」の問題

グローバリゼーションと言われ出してからもう久しい。経済活動だけでなく、世界中でよりよい仕事、教育などを求めて人々の移動が活発化し、交通手段の発達がこの動きを加速する。異なる文化的背景を持つ人々が日常生活の中で混ざり合うこの傾向は、これからもますます強まり、それにともなって我々を取り巻く文化的環境はこれから大きく変わって行くだろう。

異文化の理解や異文化とのつき合い方が、というより「文化」ということが問題になり出したのはそれほど古いことではなく、19世紀半ば頃、植民地主義が成熟してきた頃からである。植民地支配者は支配地域の文化慣習を理解する必要に迫られ、支配された植民地側の人々は圧倒的な力で自分たちの文化を押しつける支配者を知らざるをえなかった。

幸か不幸か、そのような経験を持たない日本人にとって、異文化とは欧米の見習うべきお手本という程度の安直な認識しか持てなかったのである。そして「先進国」という表現が今でも使われ続けているように、不幸なことなのだが、そういう状況は今日でもあまり変わっていないように思う。

『オセアニアの現在』河合利光 編著
「土地と首長制ーヴィティレヴ島北部ラ地方の首長制ー」収録

ヴァヌアツ共和国グナ島にて（1996.7）

フィジー、ヴィティレヴ島北部山中のナヤウレヴ村にて（1996.9）

フィジー、ヴィティレヴ島北部山中のナヤウレヴ村にて
お世話になった御一家との夕食（1996.9）

サラワク北部、カダヤン族の村にて（2000.9）

異文化観に変化の波

私が主な研究対象とする地域は、オセアニア、中でもメラネシア地域、そして東南アジア島嶼部である。文化人類学の研究手法は、研究対象地域の日常生活、文化慣習をより良く理解するための現地調査から始まる。私もフィジー、ヴァヌアツなどメラネシア地域に、その後はスラウェシ（インドネシア）やサラワク（東マレーシア）など東南アジアの村落で長期の住み込み調査をしてきた。

私が文化人類学の勉強を本格的に始めた頃、多くの日本人の念頭にある異文化といえば、せいぜいヨーロッパ、アメリカ、そして外国語といえばせいぜい英語とヨーロッパの言語くらいしかなかった。また、当時の日本人にとっての外国人、「ガイジン」とはそうした欧米人を指す言葉だった。

日常生活の中で、本気になって異文化と付き合う必要がなかった当時の日本人にとっては、私たち文化人類学者が研究対象としていた地域やその文化は取るに足らないもので、なぜそのような研究をするのか、せいぜい風変わりな物珍しさからくらいにしか理解してもらえなかった。大学の教員仲間からさえ「そんなとこ研究して何になるの、のんびりしてて良いなあ。」などと言われたりした。つまり、異文化と真剣に向き合い、考える必要がなかったのである。しかし、我々を取り巻く近年の状況はこんな牧歌的な異文化観を根本的に変えようとしている。

摩擦や衝突を繰り返す、多文化の共存

マルティカルチュラリズム（多文化主義）は日本では多文化共生などと言われ、文化の違いを超えて（無視、あるいは軽視?して）、文句など言わずにともかく仲良くしなさいという政治的な主張だが、ことはそう簡単ではない。そんなことが簡単に出来るなら民族対立など起きない。文化の違いは民族や地域の間だけでなく、世代の間にもある。多くの外国人が流入し定住するだけでなく、急速に変化し続ける現代社会は世代間でも文化衝突を引き起こす。われわれが生活する現代社会は、多文化が併存し、摩擦を生み、時に衝突を繰り返すことが特徴のひとつなのである。こうした現実を冷静に見つめ、異文化とはいったい何なのか、文化の相違がどのような意味を持つかをじっくり考えてみる必要があるだろう。人文学部の多文化共存研究センターはこうした趣旨から、子育て文化の比較、言語の多様性、宗教倫理の相違、日系ブラジル人の少年犯罪、など、多文化問題についてさまざまなプロジェクトを組み研究活動を続けている。

問題は、身近な生活や慣習の中に

少子化にともない、これからの日本は確実に急速な人口減少が進む。同時に現在の社会システムを維持するためには、労働力の不足などから、今まで以上に外国からの人口移入が必要とされてくる。こうして多文化化が進む中で、我々はそれにどのように対処し、我々の文化はどのように変わって行くのだろうか。

外来文化の移入に熱心だった近代以降、日本人は自身の日常生活のあり方や文化慣習についてあまり熱心に考えてこなかったように思う。能や歌舞伎や相撲、あるいは洗練された日本料理など、確かに日本文化ではあるだろうが、しかし、実はそれらは我々の日常生活や文化慣習ではない。そして多文化をめぐるさまざまな問題は日常の生活文化の中にある。異なる日常生活のあり方、文化慣習について考えることは、実は我々自身の生活や慣習を見つめ直すことなのである。